



デモから半年たったヤンゴン

中西嘉宏*

2008年の3月半ば、ミャンマー第一の都市であるヤンゴンを訪れた。ヤンゴンを訪れるのは昨年の8月以来である。空港で、かつてに比べて格段に早くなった入国審査を終え、しかし、かつてと同様に時間のかかる荷物の受け取りに1時間あまりを費やして、何となくたびれた体をひきずりながらヤンゴン市街にむかった。

昨年9月の大規模な僧侶中心のデモから半年近く経つ。あのデモのあと、この国はどう変わったのか。友人たちはどう暮らしているのか。出張の目的とは別に、2007年8月と比較しながらヤンゴンの風景と人を1週間ほど眺めてきた。

まず大きな印象としては、あまり変わっていない、ということである。これまでも何度か経験しているのだが、ミャンマーに関する日本や欧米の報道はどうしても政治に偏ってしまうために、報道のイメージを持ったまま現地に行くと、意外なほど日常的生活が続いていて、少し拍子抜けさせられる。今回もそうだった。

あれだけ大規模なデモが起きたことの意義は重大だけれども、大半の市民はそれとは無関係な生活が続いていた。当然だが、反応も人それぞれで、僧侶に対する政府の暴力的な弾圧に憤る人もいれば、そもそもデモにも政府にも何の期待もしていない人も多く、ある友人などは、インターネットや電話でデモの予定やコースを確かめては、デモ隊を避けるように買い物に行ったり、友人と遊んだりしていたという。家族がいる年長者は、デモに参加するリスクが高いので、僧侶へのお布施や食事の施しといった後方支援にまわる人が多くいたようだが、彼らも、ただ行進するだけでは状況が変化しないことを予想しており、支援しながらも半分あきらめていたという。一時的な熱狂が終わり、さらに深い諦念を抱え

て、市民は再び強いられた静寂に戻っていったようである。

デモの原因のひとつと言われた物価上昇は、確かに市民生活に打撃を与えている。ただそれは2005年あたりから起こっていることであって、昨年の8月半ばに燃料の公定価格が倍以上に上がったことだけが原因ではない。事実、昨年の7月の時点で、わたしが長期滞在していた2005年3月までと比べて、食料品や生活用品の価格は少なくとも3倍近くにはねあがっており、それに比べると今回、特段に物価が急に上がったという印象はない。昨年8月の燃料公定価格の値上げは、それ自体が物価上昇を引き起こしたというよりも、同じタイミングで市民が政府への不満を表明するためのトリガーの役割を果たしたと言った方がいいように思う。

ただ、街を眺めていて明らかに変わったのは、目にする僧侶の数である。今回の滞在では、ヤンゴン市街の北に位置するシュエダゴンパゴダ近くのホテルに滞在した。このあたりは僧院も多く、いつもだと多くの僧侶を目にするのに、今回はまばらである。とある有名な僧院では、昨年8月まで約400名の僧侶が在籍していたのに、現在では50名ほどしかないという。教理試験の受験者数も減少した。原因としては、デモに参加して政府に逮捕・拘束された僧侶も多いのだが、それ以上に、地方からヤンゴンに出て来て勉強をしていた若い僧侶たちが、情勢を見極めるために故郷に帰って行ったという。出家を見合わせている人たちがいるのも一因であろう。

では、今後、ミャンマーで僧侶の数が減り続けるのかと問われると、どうもそういうわけではなさそうである。9月に流れたサンガ組織解体の噂も、まったくのデマで、高僧たちは依然として政権幹部との良好な関係を維持しており、国営ニュースでは相変わらず軍幹部が高僧へお布施をする姿が放映されている。つまり、社会だけでなく、政府の姿勢もデモをはさんで大きく変わっていないのである。

* Nakanishi Yoshihiro, 日本貿易振興機構・アジア経済研究所; IDE, JETRO, 3-2-2 Wakaba, Mihama-ku, Chiba 261-8545

政府の理屈はいたって単純で、デモに参加した僧侶は、出家としての正しい道を踏み外したものであるか、あるいは、国内の特定民主化勢力に動員されたものたちであって、本来の仏教とは関係がない、という。もちろん、こうした理屈に納得している市民は少ないし、軍人の多くも信じてはいないだろう。それでも、政権の道徳的正しさは、指導者が「よき仏教徒」であることを示すことでしか確保できないのだから、なんとか理屈をつけて、サンガとの関係性を維持する他ない。政府が僧籍を制限する様子もないので、おそらく今後、政情が安定してくれば、まるでなにごとにもなかったかのように、次第に僧侶の数が増えて、かつてのそれに近づいていくのではないだろうか。このあたりが、なんともミャンマーらしい。

最後に、私事で恐縮ではあるが、ひとりの老人について記しておきたい。彼の名はマウン・マウンという。かつて、独裁政党の幹部養成学校で教員をしていたマウン・マウンさんは、1988年に一党制が崩壊したために50代目前にして失業し、英文の翻訳などをして細々と生計をたてていた。妻を若くして亡くし、子供もおらず、頼れる親戚もいなかった。

わたしが彼にはじめて会ったとき、日本から研究者が来てかつての独裁政党のことを調べたいと言っていると聞いて大学教授が来ると思ったのだろう。正装であるタイボンを着て上等なロンジーをはき、糖尿病をわずらって痛む足を軽くひきずりながら、緊張の面持ちで現れたのを思い出す。ところが、目の前には自分よりはるかに年下の頼りない大学院生のわたしがいた。まだビルマ語を片言しか話せないわたしを前にして、マウン・マウンさんは明らかにとまどっていた。

それでも、その後、国軍の文書館の職員にわたしを紹介してくれたり、かつての党幹部に紹介してくれたりとてもお世話になった。彼自身も、わたしのお礼で薬を購入し、体調は日に日に改善していった。「君のおかげで生活にも張りができた」と言っていた。本人はがんこで押しが強いので、周囲からはややけむたがられていた様子もあったが、少なくともわたしにとってはかけがえのない恩人であった。

今回ヤンゴンを訪れて、マウン・マウンさんが亡くなっていたことを知った。2005年の春にわたしが帰国したあと、半年に1度のペースでミャンマーを

訪れるたびに顔は見せていたのだが、明らかに体調は下降線をたどっていて、前回来ったときには、「おまえが日本に帰ってから生活に張りがなくなって、いつも劣等感にさいなまれている。体もよくない」と言っていた。微力ながらわたしも経済的な援助をしていたのだが、生活費のたしにはなっても、病気を治せるような額ではない。入院後、2カ月足らずで亡くなったという。

今でも思い出すのは、2004年の末にふたりではじめて民族統一党の本部を訪れたときのことである。民族統一党は1962年から1988年まで独裁政党だったビルマ社会主義計画党が名前を変えて複数政党のひとつになったものである。職員や幹部の多くは、かつての党職員や党幹部が引き続き勤めていた。党本部を訪れた第一の目的は、わたしの党幹部へのインタビューだったが、彼としては旧友に会いたいという別の目的もあったようだ。いざ本部に着くと、わたしなぞ放ったらかして、マウン・マウンさんは、旧友とは思ひ出話に花を咲かせ、はじめて会う人には、自分がかつて幹部養成学校に勤めていたこと、友人には誰がいて上司は誰だったのか、当時はどういう仕事をして今は何をしているのかを熱心に語っていた。

帰り際、本部の出口付近で、「昔に戻ったみたいだ」と本当にうれしそうに独りごちたマウン・マウンさんの笑顔をわたしは忘れることができない。今となっては、かつての独裁政党を支持する人はきわめて少ない。批判的な評価ばかりである。しかし、マウン・マウンさんにとっては、「革命」に夢をかけて、20代から40代を過ごした組織であり、そこには友人もいて、尊敬できる上司もいた。その組織が今、歴史的にどんなに評価が低くても、彼の人生の主要な時間を費やした場であることにかわりはない。「昔に戻ったみたいだ」と言った彼の顔を見たととき、それを本当に実感した。

マウン・マウンさんには調査の上でいろいろお世話になった。しかし、それ以上に、可能な限り先入観をなくして、そのとき、そこにいた人の人生を想像しながら、社会現象を論じることの重要性を、身をもって教えてくれたような気がする。昨年の大規模なデモも、多くの関係者の人生を変えた出来事だったはずである。それをどう分析するか、まだ情報と時間が必要だが、今後、考えていきたい。